

フェイル・セーフ思想は誰にでもある。肝心な一発勝負に賭けてもし負ければ元も子もないではアホらしいから、もし何らかの失敗が生じてそれをどうにか回復する手立てを前もって用意しておく。多大な経費を自己負担しての前作『ロンドン交響楽団』は、史上初のマルチのデジタル録音で収録されたが、そこにはよい音質を望むということのほかに、もしあるパートにミスが生じて、その箇所だけを修復するのによりつごうのよい技術を用いておくという発想があったに違いない。演奏のレコード化に際する編集技術はザッパのお手のものであり続けたが、それは前作「第2集」の「ストリクトリー・ジェンティール」でも大いに発揮された。さて、本作の収録は同『第1集』の中袋で告知されたが、現代の室内管弦楽曲において世界最高の演奏団体であるブルーリーズ／アンサンブル・アンテルコンタンポランがザッパの曲を採り上げて演奏したのは、ザッパの作曲家としての生涯において最高の瞬間でもあったろう。60年代をその騒々しいロックで世間を賑わせたザッパが、エリオット・カーターといったアメリカ現代音楽の重鎮と肩を並べる形でフランス国家を代表する権威によって堂々と演奏されるのであるから、こんなに痛快なことはない。それがロックにしろ、自ら複雑な曲を演奏し続けて来たことで複雑なリズムを伴う独特のパーセージが管弦楽曲でどのように響くかを感じ取れる類稀なる作曲の才能と、たゆまぬ努力、それらがようやく陽の目を見た格好だ。世間は見捨てたものではない。着実な仕事は必ず誰かが見ていることを改めて実感させる。委嘱を受けて作品を提供したのであるし、望み得る限りの演奏技術であるから、前作とは違って演奏の失敗を懸念する心配はほとんどない。しかし常にフェイル・セーフを心がけるザッパのこと、LP1枚に満たない演奏量をどうにかする必要がある。そこで用いられたのがコンピュータを用いた鍵盤楽器のシンクラヴィアで、本作は演奏困難な楽曲を人の手による抜群の精緻な技術といわばロボットによるふたつの演奏が対比される形で収録されている。ブルーリーズの演奏のみでアルバムがまとめられるのが本望ではあったかもしれないが、シンセサイザー音楽によくあるような勇壮広大を狙った安っぽい響きとは大いに異なっており、本物の室内管弦楽団が演奏しているかのように聞こえるシンクラヴィア演奏もまた実に捨て難い。そして、この本物の管弦楽団と疑似管弦楽団による演奏の対比を最晩年までザッパは行ない続けたことを考えると、本作がザッパにとって今までにない全く新たな重要な階段であったことがよくわかる。ロック・ファンにそっぽを向かれて売れないことは承知。そのためフェイル・セーフもちゃんと考えてあり、それは本作の2ヵ月後の10月に発売された次作「ゼム・オア・アス」だ。かようにザッパ44歳にならんとする84年はアルバム発表数が過去最高を記録し、ザッパの音楽があらゆる可能性の方向を彷徨、縫合した年でもあった。

ブルーリーズの演奏になる本作のタイトル曲は最も長大で、本作において初めて発表され、その後も再演は収録されていない。そして、その「全くのよそ者」という意味にはなかなか含蓄がある。本作のジャケットにはブルーリーズの顔写真はあっても

ザッパのそれはない。そこが何となくザッパのユーモア混じりの敬意の表明を感じさせるが、ザッパのロックを歓迎するファンにとってはブルーリーズは見知らぬ顔であり、一方で現代音楽の分野ではザッパはいわば馬の骨だ。このどうにも塞ぎようのない裂け目に対して本作はわずかながらでも一本の架け橋となっている。よそ者の自分など権威は相手にしてくれないと愚痴を言っても始まらない。地道にものづくりをする人すべてに励みを与える本作と言うほかない。ただし、本作はハッピーな夢と希望を描いた感動ものでは決してない。それは室内の椅子に座する犬をリアルに描くジャケットの絵画の起用や、あるいは黒地を主体としたジャケット・デザインからは誰しも不気味さを感じ取るだろう。実際、本作の各曲には人間の精神や行動における理不尽な側面を強調したようなザッパの短い文章が添えられており、その内容と照らし合わせて音楽を聴くとなおさらこの当時のザッパの、芸術や宗教、政治などの世相に対する思いに理解が及ぶし、映画音楽のとも言えるエンタテインメントぶりが楽しめる。ザッパは元来、映画音楽から管弦楽曲の作曲を始めたが、その方向の開花が本作には如実に見て取れる。実在の映画に沿って音楽を書いたのではないが、映画音楽以上に映像を感じさせ、本作を元に戻って映像をつけることもできる楽しみが聴き手には与えられている。ある種の優れた音楽はすべてそういうものだ。そして本作から想起されるシュルレアリスティックな映像は、20世紀末の不安を代弁した縮図となりつつ、あらゆる手法を貪欲に飲み込んでそれらを再提示するザッパの特異な音楽手法を、現代音楽界において広く認知させるのに格好のサンプルとなっている。ブルーリーズの演奏になるもうひとつの大曲「デュブリーズ・パラダイス」は本作で初めて発表された曲ではあるが、73年にすでにマザーズによって演奏されていたし、また「ジョーのガレージ」で発表された曲からそのギター・ソロを採譜してシンクラヴィアに演奏させた「アウトサイド・ナウ、アゲイン」などは、ザッパの作品がどのようなアンサンブルにも変換し得る実例の端的な例となっている。その境界の曖昧さは、人間対ロボット、あるいは生と死といった対立事項から始まって、ザッパ生存中のたとえばザッパが演奏しない本作がザッパ作品であることと、ザッパの死以降の本作に類したような演奏が果たしてザッパ作品であるのかどうかという曖昧さをも連想させて興味深い。つまり、ザッパの遺した楽譜を誰かが演奏したり、あるいはコンピュータ楽器にインプットすれば、そこには本作と共通した世界が開けるから、ザッパは死んだのではなく、永遠に生き続けることができる。今日、作曲家は死を拒むし、また死なない。ザッパはそれをよく認識していたし、その思いを最初に明確かつ見事に示したのが本作であった。

(2002年8月、大山甲日)